



経営組織論における臨床的(クリニカル)アプローチ と民俗誌的(エスノグラフィック)アプローチ : 定性 的研究方法の基礎と多様性を探る

金井, 壽宏

(Citation)

国民経済雑誌, 159(1):55-87

(Issue Date)

1989-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00173836>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00173836>



クリニカル
経営組織論における臨床的アプローチと
エスノグラフィック
民俗誌的アプローチ

—定性的研究方法の基礎と多様性を探る*—

金 井 壽 宏

臨床講座は真理というものを、その総合的なかたちにおいてしか知らない。……ここ「臨床医学的方法」で行なわれることは検査ではなく、暗号文の解読なのである。——ミッシェル・フーコー『臨床医学の誕生』（傍点はフーコー自身）

民俗誌（エスノグラフィー）では、その書き手は自ら時とともに歩む者であると同時に歴史を記す者である。その「資料の」源泉が容易に接近しうる近きにあるのはまちがいないが、それは極度にとらえがたく複雑なものである。……民俗誌作成者（エスノグラファー）は、網を適切な場所に張って、そこにかかるものを待っているだけではない。能動的な狩人として、狙った物を網に追い込み最も接近しがたい隠れた場にまで追いかけてなければならない。——プロニスロー・マリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』

I はじめに

研究者にプロメテウスがほほえみかける瞬間がある。自然科学での発見や工学における具体的問題解決ほどには「成果」がはっきりしないとはいえ、経営組織体のような複雑な社会現象を実証的に探求する過程においても、エウレカと叫ぶ時がないわけではない。

* MIT に在外研究期間中に、この問題について議論して下さった同僚やメンターたち、とくにジョン・バン・マーネン、エド・シャイン、ロッテ・ベイリン、ジョン・キャロル、エリック・フォン・ヒッペル、ウォルター・パウエル、ポブ・ハウス、ギデオンのクンダ、エレーンK・ヤクラ、ジョウル・クッチャー・ガーシェンフェルド、ブライアン・ペントランドに謝意を記したい。この期間中、渡米のたびに、加護野忠男教授（神戸大学）は、「早目に元気よくフィールドに出る」という励ましを下さり、野中郁次郎教授（一橋大学）は、「シンボリック相互作用論と定性的方法論もきちんとやれ」というメッセージを下さった。記して再度の謝意としたい。

大量サンプルの定量的分析において、思わぬモデレート変数の効果を見出すときなどがそうである¹。私自身のかかわった調査研究から例をとれば戦略・革新指向のミドル・マネジャーの行動が、タスク不確実性よりもむしろタスク依存性（課題を遂行する上で他部門や経営上層に依存している程度）により強くモデレートされていることに気づいたときには驚いた（金井，1984）。また、詳細な定性的データの内容分析から興味ある発見事実を得る場合もある。再び私の調査経験から例をとれば、同じ企業の同じ研究所に勤務している研究者たちの間に2種の異なる下位カルチャー（基盤蓄積型と現場即応型）が分化していることを見出して意外に思ったことがある（金井，1985²）。前者の定量データが $N=1231$ （47社より）であるのに対し、後者の定性データは、 $N=25$ （1社より）であった。

他面で、このような結果を得るまでの試行錯誤や結果を得てから後もつづく不協和音も、探索的研究につきものである。その苛立ちも、定量的研究の場合には説明力が3割にも満たない回帰分析であるかもしれないし、定性的研究では、分析を拒むかのごとく机の前にそびえる（コーディング前の）1000頁のフィールド・ノートかもしれない。

定量的データと定性的データを補完的に併用すること（cf. フィールド・インタビュー&フィールド・インタビュー，1986）を、私なりにこれまでもめざしてきた。ポストン近郊の企業者コミュニティに関する調査（金井，1987ab，1988abd）でもその立場をとった。帰国後、この調査での研究方法について他の研究者に尋ねられることが少なくない。またあらためて自ら反省することもある。その際、どうしても異なる文化圏での（少なくとも私にとっては）未知のコミュニティに

1 定量的研究方法でも、仮説やモデルの検証ばかりでなく、一般にEDA(exploratory data analysis)と総称される、「探索的」ないし「発掘的」方法の重要性が認識されている（ハートウィッグ，1979；cf. ベイリン，1987）。

2 いずれの例示も、個人的な発見ではなく、金井（1984）は、野中郁次郎教授（一橋大学）、加護野忠男教授（神戸大学）、大滝精一助教授（東北大学）との共同プロジェクトの結果の一部であるし、金井（1985）の定性的データは、加護野教授、榎原清則助教授（一橋大学）と共同で収集されたものである。

対する調査であったためか、どちらかというに参加観察や面接などの定性的方法の方に議論が集中する。質問票調査による定量的データの収集については、金井(1987b, 1988a)の附録から明瞭であるのに対して、定性的データの収集過程、その過程での困難、ならびに「エウレカ」の瞬間はさほどクリアに説明されつくされていなかったであろう。

本稿の契機は、この点の不備を補足することにある。しかし、より積極的な目的は、たんなる補足説明を超えて、ある角度から定性的研究方法論の奥行きと多様性を、事例に即してじっくりと探ることにある。

その際の方法論上の鍵概念は、定性的研究方法における「臨床的(クリニカル)」アプローチと「民俗誌的(エスノグラフィック)」アプローチの対比であり、この対概念にもとづいて私自身のポストンでの調査プロセスを再度跡付けてみることにしたい。とりあげる2つのアプローチの提唱者は、私の恩師・同僚であり、検討する調査例は、私自身の実証研究(金井, 1987 ab, 1988 abd)である。以下の本稿での論考は、レビュー部分を除けば、意図的にパーソナルなものになる。調査プロセスの実際がパーソナルに語られることは稀だから敢えてそうすることにした(cf. マーティン, 1982)。

II 定性的研究方法の基礎と多様性

定量的な(公表)二次データや質問票調査による定量的データにはない、定性的データに独自の持味は、「生きられる」ままの世界の全体像への手掛りである。その世界の要素にずたずたに還元された「客観的」世界でなく、その世界の中にいる人によって生きられるままの「主観的」世界である。あえて現象学者と標榜するか否かを問わず(cf. シュッツ, 1970; パン・マーネン, 1979 a), 「現場」に出向く研究者は、現場の全体的雰囲気^{フィールド}を肌で感じる^{フィール}こと(フィールド・オブ・ザ・フィールド)の重要性の認識を共有している。この点に、定性的方法論の基礎と存在理由がある。

このような立場をあらわすいくつかの用語、たとえば、「内部者の視点」と^{ネイティブ}

「局所的 (その地の) 知識」(ギアツ, 1983), 「^{グラウンデッド・セオリー}根づいた理論」(グレーサー & ストラウス, 1967), 「日常の理論」(加護野, 1988) 「自然な (ナチュラル) 社会学」(ジャッツマン & ストラウス, 1973)³, 「フレーム分析」(ゴフマン, 1973) 「エスノメソドロジー (素人なりの理屈・方法)」(ガーフィオンケル, 1974; ライター, 1980; ロージャズ, 1983; ヘリテージ, 1984), 「組織民俗誌 (organizational ethnography)」(バン・マーネン, 1979b), 「臨床的データ収集法」(シャイン, 1983, 1985 a, 1987 a)」などの用語や立場が, 経営組織論の文献においても徐々に見られるようになってきた。

調査対象となる社会, 組織, ないし集団における内部者の考え方に迫る対照的方法として, 本稿では特に, ここで最後にあげた 2 つのアプローチに注目する。

II.1 プロセス・コンサルタントとエスノグラファーの研究者像

(1) クリニシャンないしプロセス・コンサルタント

シャイン (1969) は, 何よりも組織開発 (OD) の古典として知られる。NTL (National Training Laboratory) の初期から OD の推進にかかわってきた。その後の組織社会化, キャリア開発, ^{カルチャー}組織文化, リーダーシップなどの研究でのシャインの貢献は周知の通りである。むしろ知られていないのは, 組織心理学や OD に至るまでの前史である。

3 つの重要な契機をシャインは強調する。⁴ ひとつは, 1950年代なかばのハーバード大学の社会関係学部での Ph. D. プログラムにある。そこでは, 実験社会心理学, 臨床心理学, 社会学, 文化人類学にまたがる学際的プログラムがめざされ, かつ現場でのインターンとしての「臨床」経験が必須としてプログラムに組み込まれていた。当時このプログラムに在籍していたシャインは, ウォル

3 認知心理学における「素朴な (ナイーブ) 心理学」(ハイダーやケリーに始まる) は, ディシプリンも異なり定量的アプローチだが, 研究者の公式の理論より, 「生の」使用中の理論の存在を認める点では共通の関心をもっている。業界通の内部者見解を生かした経済学寄りの研究としては, フォン・ヒッペル (1988) を参照されたい。

4 シャインとのパーソナル・コミュニケーションならびにシャイン (1987a, pp.7-8) にもとづく。

ター・リード陸軍病院の精神科で1年間インターンとして、心理テストを実施すると同時に病院がいかに運営されるかを、内部者として直接観察する機会をもった。

もうひとつの強烈な経験は、朝鮮戦争後の POW（戦時の捕虜）交換計画に、研究者かつ臨床家として携わったことである。北朝鮮の、さらに後には大陸中国の捕虜収容所から出て、米国の市民に再度適応・復帰するプロセスを研究者として観察し、臨床家としては、そのプロセスが円滑になるよう（自己治癒力に働きかける形で）助力した⁵。シャインの処女作が、POW に対する「洗脳」（組織影響力の一形態としてのブレン・ウォッシング）に関する著作であり、それがこのときの臨床的面接にもとづいていることは、意外に知られていない。

第3の契機は、デジタル・イクウィップメント社（DEC, 1957年創立）の創業者ケン・オルセンの招きによって、この組織体の草創期（1959年）以来、同社の経営トップ・レベルのプロセス・コンサルタントをしてきたことである。POW の研究を終え、MIT のスローン経営大学院に赴任したとき、「経営」なるものの内容には素人だった（また、そうであるが故に、他の教官のシラバスを集めかけていた）シャインに対して、ダグラス・マクレガーは、「何を教えてもよい」と言ったという。同時に、マクレガーは、シャインにメイン州ベセルに本拠を構える NTL の T-グループを経験するようにすすめた。NTL は、周知の通り、クルト・レヴィンの考えにもとづきグループ・プロセスの「経験的学習」のために創設された OD 専門家養成のメッカである。経営組織にアプローチするに際して、たとえば戦略なら戦略の「内容についての専門家」（content expert）になるよりも、むしろ戦略が生じてくる「プロセスの促進者」（process facilitator）として接する方が、かえって対象組織にとっても、

5 シャインは“helping”という側面を、臨床家の必須要件とみているが、それは、依頼人を依存的にさせることではない（だからこそ、後述するように答を出してしまう内容のコンサルティングを避け、プロセス・コンサルテーションに特化する）。河合（1970, 1975, 1976）やメイ（1938）における臨床的な心理療法やカウンセリングも、このような依頼人（来談者）の自己治癒力を前提としている。

(臨床的モードの)研究者にとっても有効である状況がけっこう多い (cf. シャイン, 1978)。プロセス・コンサルテーションは、

依頼人(クライアント)によって設定された状況を改善するために、依頼人の置かれた環境で生じるプロセス面での出来事を依頼人がうまく知覚し、理解し、それに働きかけるのを助けるというコンサルタントの側の一連の活動である、

と定義されている(シャイン, 1987 b, p. 34; 1988, p. 11)。

シャインの提唱する経営組織論における臨床的アプローチは、彼独自のプロセス・コンサルテーションという OD (手法というよりその考え方) に密接であり、それに基礎づけられている。

(2) 内部潜入者, もしくは組織エスノグラファー(組織体の民俗誌家)

ある社会組織や集団を真に(特にその動態を)理解するには、その対象に働きかけそれを~~変えてみる~~ことであるといったのは、グループ・ダイナミクスの創設者、クルト・レヴィンである。シャインのアプローチは、この考えの忠実な延長線上にある。

これに対して、どの程度完全に内部者になりきるかには程度の差こそあるが (cf. アドラー & アドラー, 1987), 社会人類学や文化人類学の流れを汲む、コミュニティ調査や組織・集団の調査では、その内部に入りこみながらも、できる限り対象となる社会ユニットに不用意で余計な変化を惹き起こさないことに細心の注意が払われている。この点について、「人類学者は、村落(部族, 街, 近隣……)を調査するのではなく、村落で調査するのだ」というギアツ(1973, p. 22, 傍点はギアツ)の言葉は、まさに至言である。

ASQ (*Administrative Science Quarterly*) 誌が、経営組織の定性的研究方法論を1979年に特集したときに、特別編集者に選ばれたことからわかる通り、ジョン・バン・マーネンは、組織論における定性的研究の奥行き・重要性の主張者である (cf. 1979 b)。バン・マーネンは、一方で定性的方法に多様なアプローチがあることを組織論研究者の間に啓蒙的に広めようとしながらも、⁶ 他

6 バン・マーネンは、たとえば、Sage Publication の定性的研究方法双書 (Series on Qualitative Research Methods) の編集主幹である。

方で自らは首尾一貫して、民俗誌的アプローチを追求してきた（バン・マーネン、1973、1979 b、1982、1988）。その目的は、内部者の（もしくは内部者に近い）眼を通しての文化の理解であり、この立場は、「民俗誌は文化とフィールドワークを結合する」（1988、p. 4）という簡潔な言明に表われている。

組織論の研究者としてバン・マーネンが、方法としては参加観察による民俗誌的アプローチを、調査対象としては警察組織を、選択したのは、相応の理由がある。⁷ 理論的には、当該社会における逸脱行動を統制するエージェントである警察官が警察組織によってどのようにつくりあげられ（社会化）、統制されているか、というのが研究課題である。その背景にある素朴な研究動機は、ごく普通の友人であった人物がポリス・アカデミー（警察学校）を出てパトロールをし始めると、すっかり警察官らしくふるまうようになったことへの驚きであった。組織への社会化（当該組織で正当とされる価値観やものの考え方を内面化していくプロセス）の研究は、質問票による継時的なデータでも可能である。⁸ 実際、バン・マーネンは、どちらかという質問票調査の定量的分析を中心とした Ph.D. 論文をまとめることになる（cf. バン・マーネン、1975）が、参加観察による定性的研究からの洞察の方がはるかに強烈だったという。

彼の考えるところによれば、「普通の人物」を「警察官らしく」してしまうポリス・アカデミーの内部に入ることなく、社会化の実際は理解しえない。ロサンゼルス市警をはじめ15以上の候補地にアクセスを図ったが受け入れられなかった。結果的には、「幸い」知り合いの教授がユニオン市（仮名）警の幹部に感受性訓練を実施したことを耳にした。この教授のついでにユニオン市警のポリス・アカデミーに入学できた。修了するまで他の入学者とまったく変わらない内部者として潜入し（ただし、幹部は彼が社会学者であることを知っていた）、社会化のプロセスを参加観察した。修了後は、ピストルを携帯しパトロ

7 以下の記述の大半は、バン・マーネンとのパーソナル・コミュニケーションにもとづく。

8 カリフォルニア大学アーバイン校の社会学の Ph. D. プログラムは、定性的研究に深い理解をもっていたが、組織論という領域ゆえに、当時同校にいたライマン W. ポーターが、彼の Ph. D. 論文委員会の委員の1人に入っていた。

ール・カーに乗るようになるが、その時点までには、これ以上、調査目的をふせることは「調査倫理」の上で問題があるため、身分を明かし準内部者に転ずる。Ph.D. 論文完成後も、何度となくユニオン市警を再訪し、1973年と78年には、それぞれ6週間、10週間でそこですごしている。先のギアツの引用にみる通り、ここで重要な点は、ユニオン市警を客体として要素還元的に分析することによってでなく、ユニオン市警で主体的に内部者として他の人びとと共に経験を共有することによってはじめて民俗誌が記述される、ということである。バン・マーネン (1982) には、「ジョニー [バン・マーネンのこと] ピストルを得る」という類いの写真が豊富である⁹。

II.2 定性的研究におけるCモードとEモード

定性的研究方法の基礎が「現場での経験」という点で共通である限り、臨床的アプローチと民俗誌的アプローチの相違点ばかりを強調しすぎて両者が対立的であるかのごとく扱うのは、生産的ではない。シャイン (1983, 1985a, 1987b) が指摘する通り、両者は対照的であるがゆえに補完的なのである。「あれかこれか」という選択の問題というよりも、むしろフィールド・リサーチを経験しているときに自らのアプローチがどこにあるのかを自覚し位置づけるための対比なのである。臨床家(クリニシャン)と民俗誌家(エスノグラファー)が共同研究することも可能だし、さらには、一人の研究者がある時点では臨床家的モードで(以下、Cモード)で、別の時点では民俗誌家的モード(以下Eモード)で対象組織と接することも可能であろう。ただし、いずれのモードに立っているのか自覚せず無意識に両モードを混淆させるのは、好ましくない。表1に、このような位置づけのために、CモードとEモードとを主要な項目ごとに対比している。この表は、バン・マーネンとの日常的接触・議論からシャインによって作成されたメモ書きにもとづいている。表が全体として示す

9 写真が、社会現象の定性的解明のキーとなることがある。写真分析については、ゴフマンの広告分析もよく知られているが、ベッカー (1986) なども参照されたい。

表1 定性的研究プロセスにおけるC（クリニッジャン）モードとE（エスノグラファー）モード

	Cモード（臨床家的側面）	Eモード（民俗誌家的側面）
・誰のニーズによりプロセスが動き出すか	— 依頼人（クライアント）	— 研究者
・問題の源泉，焦点	—（組織の）病理，依頼人のかかえる問題	— 研究そのもの，もしくは理論上の問題点
・モチベーションの源泉	—（組織の）病理に対処し，克服したいという依頼人の欲求 —（臨床家）の「助けたい」という欲求	— 知識を新たに追加したいという研究者の欲求
・作業のペース	— 依頼人／問題したい	— 研究者の欲求したい
・概念上の焦点	— 規範的；病理的側面重視	— 中立的；通常状態重視
・（法的／心理的）契約	— 報酬に応じた用役 — 「誤診」への法的責任	—（結果の）フィードバックへのアクセス （組織への）参与と協力
・システムへの入り具合	— 高水準 依頼人の側が助けを求めている	— 低水準 最初は混乱してうまくいかないものだ（システムの側）は覚悟している
・収集されるデータのタイプ	— 深い； 病理的側面重視 — 理論／モデルが支え	— 広範もしくは深い； 研究上の焦点重視 — 観察（そのもの）が支え， もしくは理論が支え
・妥当性の確認	— 主題に焦点 — 「治る」 — 予測力 — 追 試 — 同じケースを扱っている人びとのみかたとの一致 —（他の）組織病理の専門家の意見	— コンテキストに焦点(?) — 追試（追認） 「(内部)メンバーによるテスト」(内部者が読んで納得できるか)
・（調査）結果の公開	— 偽名にしたケース — 一般化；(複数の)ケースからのモデル — 依頼人の承諾	— 正体を明示した，もしくは偽名にした諸集団の濃密な記述；抽象的な一般化 — 研究者のイニシャティブ
・研究者の養成	— 診断の理論 — 「人を助ける」理論 — 臨床のインターン制 —（インターンの）スーパーバイズ体制 — 「助ける人」としての資格	— 一般理論 — 学位論文 — 研究者としての資格

表 1 (つづき)

Cモード(臨床家的側面)	Eモード(民俗誌家的側面)
—(組織への)介入(ゆさぶり)にまつわる倫理	—データの収集, 分析, 発表にまつわる倫理
—依頼人とのコミュニケーション力	—同僚とのコミュニケーション力

Cモードでありながら研究者(Eモードを含む)でもあるための仮定(レヴィン)「アクション・リサーチ」

- 1) 人間から成るシステムは, それを変えようとしないうり理解できない。
- 2) データ収集に際して, また, 意味の解釈をより明瞭にする際にも, (実験)参加者ないし内部メンバーに入ってもらわないといけない。

出所 シャイン(1983)の手書きメモより, 一部補足, 加筆。

注 Cモード, Eモードというタイトルはオリジナルの表にはなく, 正確には, 左側のCモードの方が臨床的パースペクティブに対応し, 右側のEモードには, エスノグラフィー(民俗誌)だけでなく, ジャーナリスティックなものも含め他の定性的研究一般が念頭におかれている。

パターンこそが肝要なので, ここでは逐次各項目を説明することはしない。

最も重要な相違点は, Cモードでは, 対象組織の誰か(通常トップに近い人)が問題をかかえてプロセスを調べてもらうことを依頼しているので, それだけに立ち入ったデータを得やすい(その反面, 守秘義務に慎重でなければならないし, 研究上の関心があるからといって他の領域に調査の焦点を移行していくことはできない)のに対して, Eモードでは, 研究者の側から調査を依頼するので, 組織に入りこむまでの手順はかなり困難だし, 内部に入っても自然とデータが湧き出るわけでもない(しかし, 徐々にラポールが樹立されるとキー・インフォーマントを導きの手にして組織の様々な部署に研究上の必要に応じて立ち入ることができる)という点にある。一方の短所は, 他方の長所で補われている。

この表にあげられていない項目で, 後にシャイン(1987a)で指摘されている点は, Cモードでは, 経営トップや事業部長・部門長などのパワー・センターと接することが多いのに対し, Eモードでは, 組織の現場レベルから入ることが多い, という点である。この点でも両アプローチは補完的である。

CモードとEモードは, 以上のような対比にもかかわらず, (1)組織内での研究者の役割の曖昧性, (2)科学的客観性へのコミットメント, (3)(定量的研究方

法では見えない) 舞台裏(や微妙な情報)を扱う能力(感受性)の必要性, において共通している(シャイン, 1987 a, pp. 59-63)。

シャインの経験によると, DEC 社での調査の大半は, プロセス・コンサルタントとしてCモードに終始してきたが, その間, 重役会レベルでの民俗誌的なデータも多く得たという。また, カンター(1983)の調査対象の1社(偽名)がDECであることから, 相対的にEモード寄りの研究者による定性的記述が自らの研究(シャイン, 1985b)とよく符合しているともいう¹⁰。

逆に, Eモードで研究をはじめても, 内部メンバーによく受け入れられ信頼感が生まれると, ときにはプロセス面でのコメントや助言を求められたりして, Cモードの側面が生じてくる(cf. シャイン, 1987 a, p. 24)。たとえば, パウエル(1985)は, 2社の学術書出版社の民俗誌的研究であるが, この業界の編集者の仕事の内容に詳しくなるにつれ, Cモードの助言を求められるばかりか, ある出版社から編集部長にリクルートされかけた¹¹。ただし, 注意しなければならないことは, Cモードのコンサルテーションが, 内容面にまで入りこんでしまうと, Eモードの研究者にもどることはとうてい困難であるし, もはやプロセス・コンサルタントの役割も稀薄にならざるをえないということである(cf. シャイン, 1988, p. 149, p. 173)。換言すれば, 当初は研究者として経営組織に入った人が, たとえばBCGやマッキンゼーのように, 経営戦略なら戦略の内容に関してコンサルティングを始める(シャイン(1978)のいう医者—患者モデルに立つ)刹那, その人は, もはやCモードでもEモードでもデータを収集・分析・解釈する研究者の立場をかなりの程度まで破棄してしまうことになる。データは, 解決案(内容)を知らずプロセスを追う間のみ生産的に

10 シャインとのパーソナル・コミュニケーション。なお, カンター(1977)はかなり純粋なEモードの研究であったが, カンター(1983)では, 多分にCモード的要素を増している。両著作の間の時期にMITスローン経営大学院で客員教授をしたときに, カンターはプロセス・コンサルテーションに大きな興味を示したと聞く。経営学になじみの文献では, 古典としてはブラウ(1955), ドルトン(1959), グールドナー(1954), 最近ではやジャーナリストティックではあるがキダー(1981)などが, かなり純粋なEモードに近い。

11 ウッディ・パウエルとのパーソナル・コミュニケーションにもとづく。

生じ、その意味が見出されるのである。

III ポストンの企業者コミュニティに関するフィールド・スタディ

III.1 研究調査プロセスのクロノロジー

研究調査プロセスの「ゴミ箱モデル」——J. G. マーチの意思決定モデルからの借用であることはいうまでもない——という名の下に調査の現実を描くマーティン（1982）によれば、研究の実際の過程は、公刊されるときに整然となっているほどリニアではない。つまり、彼女によれば、(1)理論的問題の定式化、(2)研究方法の選択・調査の設計と実施、(3)結果の分析と解釈、(4)結果にもとづく、もとの理論的定式化の確認ないしは棄却、という順に流れる研究過程の合理的モデルは現実的ではない。実際はどうなのだろうか。1984年から87年にかけての私の調査に関しては、以下に正直に記す通りである。

- (1)理論的に重要な研究課題を常に念頭においてはいたが、それ以上に、MIT に在籍していることを生かせる調査、ポストンでなければできない調査、（将来の比較研究を考慮に入れ）日本にはない何かが見つかりそうな調査をめざした。つまり、理論的に何が重要かということだけでなく、何が調査できそうかという（プランフル）オポチュニズムを優先した。MIT エンタープライズ・フォーラムという企業者ネットワーク組織を最初の調査対象としたのは、このような契機と、初めて参加観察したときに受けた（理屈を超えた）衝撃とによるところが大きい。
- (2)研究課題が理論的にいかなるものであろうと、当初から質問票調査のみに頼ることは避けようとはあらかじめ決心していた。方法論的トライアングレーションを、異文化の地で試したいという欲求の方が、理論的課題の定式化より先行していた（結果的には、企業者コミュニティの文化にかかわる理論的テーマに準民俗誌的な定性的方法はよく適合していた）。調査デザインにおける、面接予定者、対象組織の選択は、いわゆるスノーボール・サンプリング（「雪だるま方式」¹²）と「理論的サンプリング」（グレーサー & ストラウス、1967）の併用であった。もうひとつの比較対象組織、SBANE（ニュー・イングランド地域小企業協会）エグゼクティブ・ダ

12 ある企業者に面接が終わると必ず「このネットワーク組織の参加者で、次に誰に会うことをすすめるか」、「このポストン地域で他に特筆すべき企業者ネットワーク組織は何ですか」と聞くようにした。その中から、何らかの理論的属性から興味あるカテゴリーの人ないし組織を次に訪ねるようにした。より詳細な比較研究対象となるネットワーク組織を二つにしばりこんでからは、両組織のキー・インフォーマントがしかるべき人を探し、アクセスするのに、多大な協力をしてくれた。

イア・ログ・プログラムに、半計画的に「遭遇」できたのも、このような雪だるま方式を、調査の初期の段階に実施しておいた結果にはかならない。

- (3)ある程度、面接調査、参加観察と内部文書の閲読が進んだ段階で、パイロット・サーベイをやり、この時点では、既存の理論からの仮説検証も意識していた (cf., 金井 (1987b) におけるグラノペター (1982) 仮説のバリエーションの検証) が——このパイロット段階でのデータ源と調査方法については、表2を参照——、2組織の比較研究という方向が定まるにつれ、データの追加的収集と解釈の間を、何度も行き来することになった。
- (4)当初定式化した理論をテストするというより、2組織の対比を通じて、理論的に重要な属性や次元を見つけ出し、企業者ネットワーク組織の体系的なタクソノミー (分類枠組) を構築すること (つまり「公式理論の検証」というより「根づいた理論 (グレーサー & ストラウス, 1967) の発見」) が最終的課題となった。タクソノミーが明らかになるにつれ、再びより大規模なサーベイ調査をおこなったが、その目的も、タクソノミーの検証というよりは、その精緻化のための追加的データ収集といった方が適切である。サーベイに用いた質問調査票のプリテストしたいが、構築されつつあったタクソノミーに欠けていた属性や視点をさらに発掘するのに役立った。プリテストの重要性はいくら強調してもしすぎることはない。この第4段階においても、論理実証主義でいわれるような、反証可能性に開かれた厳密な検証

表2 パイロット段階のデータ源と調査方法

フォーラム関係者のタイプ	異なる調査方法からのデータ源			
	面接 ¹	質問票調査	文書類 ⁶ (アーカイバル)	観察 ⁷
運営委員	*** (N=17)		**	*
発表者 (大フォーラム)	* ²	** ³ (N=22)	**	**
発表者 (小フォーラム)		** ⁴ (N=24)	*	
一般参加者 (聴衆)	* ²	** ⁵ (N=94)	*	**

注 *** 主要データ源, ** 2次のデータ源, * 補助的データ源

- フォーラム運営委員会の委員との半構造化、オープン・エンド面接
- 上記(注1)の面接における、発表者の選抜、発表者にとっての利益、一般参加者のカテゴリー、一般参加者の利益に関する質問
- 運営委員会によって実施され、著者により分析されたサーベイ
- 運営委員会によって実施されたサーベイ
- 本調査のため、著者によりデザイン、実施、分析されたサーベイ (調査全体にとって主要データ源となるが、本稿では定性的面接資料に重点をおくため、ここでの扱いは副次的である；このサーベイそのものの分析結果については金井 (1987b) を参照。
- フォーラム・レポーターおよびその他の内部資料ならびに公表資料
- 1985年9月から1986年3月における例会、1985年11月における年次ワークショップにおける参加観察

出所 金井 (1987a), p.72 より、一部変更・修正。

表 3 全調査を通じての複数のデータ源と調査方法の組み合わせ

比較対象の下位サンプル		主要目的
データ源・調査方法	M. I. T. エンタープライズ・フォーラム	SBANE ダイアログ・プログラム
フィールド観察		
一非関与的参加観察	一月次ケース発表例会 (1985年9月—1986年3月)	一會合を経験し、現場の“感じ”をつかむこと
	一年次ワークショップ (1986年10月と1987年10月)	
	一ニューベンチャー・クリニック (1987年6月)	
一「準」非関与的観察		一グループでのダイアログ・セッション (1986年12月—1987年3月)
		一SBANE 本部ダイアログ委員会 (1987年2月)
面接		
一オープン・エンドの半構造化面接	一フォーラム運営委員会の委員(N=17)	一1986年ダイアログの全グループ・コーディネータとメンバーの一部(N=23)
		一プログラムにかかわってきた経緯、およびその機能と使命についての内部者の見解を得ること
一反復・非構造的面接 (主要な情報提供者)	一全米ディレクター	一教育担当ディレクター (および SBANE の専務理事)
		一両組織体の沿革を学ぶこと、および他の調査データについてのフォロー・アップ
記録文書データ	一フォーラムのパンフレット	一ダイアログ・プログラムのパンフレット
	一「フォーラム—技術基盤の小企業への資源」(フォーラムの目的の公式の記述)	一基本原則と手続書
	一フォーラム会報 (『フォーラム・レポーター』)	一SBANE 会報『エンタープライズ』掲載のダイアログ関連の記事
	一発表企業についてのその他の情報	一會合のフィードバック質問票(原則としてはグループ・コーディネータが記入した内部資料)
	一フォーラム運営委員会による発表企業調査の結果(内部資料)	一外部のマーケティング・コンサルタントが作成した SBANE の会員調査の報告書
	一運営委員会メンバー等によるフォーラム	一過去と現在のダイアロ

表3 (つづき)

データ源・調査方法	比較対象の低位サンプル		主要目的
	M. I. T. エンタープライズ・フォーラム	SBANE ダイアログ・プログラム	
	についての出版物 —会報の郵送リスト	—参加者のファイル (参加者リスト, ホストのメンバーへの案内状, 会社資料, その他の関連資料)	
質問票調査			
—パイロット調査(月次例会でフィールド実施)	—1987年3月の月次例会参加者(N=64)		—一般聴衆について調査すると同時に質問項目がどのように使えそうかをみること
—包括的比較調査質問票(郵送調査として実施)	—最新の郵送リストにおけるフォーラム・レポーター購読者(N=165)	—1986年のダイアログのメンバーとそれ以前の元メンバー(N=124)	—体系的な調査をおこない、創発的仮説にまつわる比較可能なデータを得ること

出所 金井(1988a), pp.96-97. 一部修正追加。

はあえてあまり意識されていなかった。しかし、「何か理解できた」という実感(「エウレカ」感覚)は、一万票を超すデータ・ソースをもつ金井(1984)のときよりもはるかに大であった。

調査プロセスの全体像を、調査方法・データ源別に整理したものが、表3である。しかし、実際の調査プロセスをクロノジカルに(生じていった順に)配列し直し、偶然的(進化論的)な部分と計画的な部分、ならびに両者が合流しあう時点で整理し直して、ある機会に発表したことがある。その時に使用したOHPスライドの原稿を附録として(英文のまま)再録した。マーティン(1982)のいう通り、調査プロセスがリニアでなく、多くの運¹³にも左右されていることが、この附録の表によくあらわれているはずである。

III.2 研究調査プロセスにおけるCモードとEモードの実際

研究調査の各ステップを通じて、私のとったアプローチは、全体像としては、

13 運は、それを探し求めるもののみ見えるという意味には、調査プロセスにおけるこの側面をさす言葉としては、luckよりもむしろserendipityの方がより適切であろう。

民俗誌的（少なくとも準民俗誌的）なものであった。しかし、細かくデータ収集法をふり返ると初期の観察データほどより純粋にEモードに近く、後の段階の面接データや（自然に生じた）グループ討議の場面では、往々にしてCモード的な対応も増加した。また、調査対象組織によっても、（フィールドにいる内部者の眼からみた）私の役割は微妙に異なっていたし、先に MIT エンタープライズ・フォーラム（以下、フォーラム）、次に SBANE エグゼクティブ・ダイアログ・プログラム（以下、ダイアログ）にアクセスしたという調査の順序も、フィールドでの役割期待に決定的な影響を与えた。ここでは、質問票調査やアーカイバル（記録文書）データについては最小限のコメントにとどめて、フィールドでの観察データと面接データを中心に調査プロセスをたどることにする。

(1) フォーラムでの非関与的参加観察データ

フォーラムは、次のような特徴をもつ組織である。(1)1978年に MIT の卒業生有志とその友人により、企業者活動について広く啓蒙する目的で始められた。(2)会報の購読者は、2,000名近くいるが、そのうち約200名が毎月の例会に参加する。例会ごとに参加者は適当に入れ替わる。(3)会合は、MIT の大教室で、2社の事例発表とそれに関するパネル討議・質疑応答という形でかなりフォーマルにおこなわれるが、その反面、参加資格や守秘義務などの厳格な取り決めはない。気楽だが、（情報を語り切るには）危険な場といわなくてはならない。(4)技術に基盤をおくベンチャー企業（例会の発表企業）を多方面から支援することが集まりのねらいである。そのため、他の企業者ばかりでなく、ベンチャー・キャピタリスト、銀行家、弁護士、会計士、大企業の従業員（主としてエンジニア）も集まる。

調査当時、私は MIT の内部者であり、フォーラムの会報の購読者でもあり、MIT の刺激によって生じているボストン近郊の企業者活動に興味をもつ者であった。つまり、（実際に事業に役立てるといった類いの参加動機を除けば）、私は他のフォーラム参加者と変わるところがなんらない一般参加者であった。

また、会の規模が200名近くもあり、しかも中核メンバー（フォーラム運営委員会の委員や元委員、ならびに彼らと強く結びついている人びと）以外の参加者は流動的に例会ごとに入れ替わるので、私の存在は例会で生じる現象にほとんど影響を与えてなかったといえる。その意味で非関与的（unobtrusive）な参加観察であった。なお、ケース討議という性質上、大半の参加者がノートを広げてメモを取っているのので、その場でフィールド・ノートを取ることも自然なことであった。

フォーラムでの観察のデータはかなり厳密にEモードで収集されたといえよう。とくに初期ほどそうであった。面接調査（やその他の類似の会合への参加）を重ね、フォーラムの常連との知己が増えるにつれ、後にはプロセス上のコメントを求められること（つまりCモードへの役割期待）を生じたが、それは特筆すべきほどのものではなかった。

(2) フォーラムでの面接データ

フォーラムは『インク』誌や地元のハイテク企業向け新聞にとりあげられたことはあったが、IEEE誌へフォーラムの運営委員自らが投稿した論文を除けば、フォーラムに関する第三者によるアカデミックな研究はなかった。そのため、慎重にアプローチすれば、フォーラムの全米ディレクター（唯一人だけフル・タイムの専従事務局長——他の運営委員はボランティア）から、かなりの協力を得られる見込みがあった。実際、彼との面接回数は数十回に及び、ホワイト（1943）にとってのドックと同じようにキー・インフォーマントになってくれた。

フォーラムの中核メンバー、とりわけ創設時から参与した人びとの正式な面接は、全米ディレクターの電話紹介、MIT スローン経営大学院教官の紹介状、私自身の調査依頼状（リサーチ・プロポーザルを同封）と電話による補足説明、によってこれもまたきわめて慎重にアレンジされた。3名都合がつかなかったが、20名の候補者のうち17名に対して、オープン・エンドの半構造化インタビューを実施できた。¹⁴

「お忙しいところなんとかお会いしたい」という電話での調査依頼の確認時に、「実際、私は忙しいよ」ともらず人が多かったのには驚いたが、会ってみると90分の要求に対して、2～3時間費やしてくれたこともあった。面接データはすべてテープ録音され、後にタイプに打ち直した。しかし、ごく少数の同一人物に繰り返し面接を重ねるというスプラドリー（1979）流のEモード面接法は採用できなかった。むしろ、中核メンバーに対してのフォーマルな面接よりもむしろ、例会において（たとえば休憩時に）一般参加者と「自然に生じる面接」（naturally occurring interviews）の方がEモードに近かったかもしれない。ただそれらはテープ録音されなかったので、微妙な言い回しを含めた再現度・信頼性は中核メンバーとの面接データの方がはるかに高い。

相対的ステータス フォーラムの中核メンバーは、ボストンの企業者コミュニティの「中腹」¹⁶を代表する人びとである。被面接者には、ハーバードやMITの現職教官、元MITの準教授で辞職後に会社を起こした人、MITを名誉事務官として退官し、ある大学の学長職についた人、などが含まれる。他面、調査当初の私の方は、（少なくとも彼らにとっては）名の知れない異国の大学から来た外国人で、ボストンの企業者コミュニティの何たるかのイロハも知らぬMIT客員研究員であった。このステータス格差ゆえに、一方でエリート・インタビュー（デクスター、1970）にまつわる困難が生じたが、他方で（私の方から彼らに押しつけるような仮説や思い込みを事前にもつことなく）虚心に「とにかく聞き耳を立てる、内部者の考えを教わる」というEモードの立場を貫けた。

14 面接ガイドラインは、金井（1987b）附録 pp.295-298、参照。

15 テープ録音によって、espoused response を得る懸念や組織内部のマイナス面にふれないという懸念はあまりないことはかなり初期に判明した。たとえば、ある人は、テープのスイッチを自ら切って、他のある委員のことを罵倒したし、また別の人びとは、かなりネガティブなことまで自然と語った。

16 「頂上」に立つ、ケン・オルセン（DEC）、アン・ワング（ワング・ラボラトリー）、レイ・ステータ（アナログ・デバイシス）などは、ゲストとしてフォーラムに招かれることはあっても常連ではない。

(3) ダイアログでの「準」非関与的観察

ダイアログは、フォーラムと対照的な特徴をもつ¹⁷企業者ネットワークである。その特徴は以下のように要約できる。

(1)1970年に、SBANE の会員企業の女性経営者が SBANE 内の同輩・先輩たるベンチャー経営者を募って10名程度の会をもったのが前身である。(2)母体の SBANE の会員数は約2,000社だが、そのうちダイアログ会に加入しているのは150~60名である。加入者は原則として1グループ15名以下のダイアログ・グループに入る。つまり、150~60名が毎回一堂に会するのではなく、グループ単位で交流を深める（しかし規則により1年ごとにグループ間でメンバーを交替する）のである。(3)会合は、SBANE 本部ではなく、原則として毎月1回各ベンチャー経営者の会社もしくは自宅を回り持ちすることになっている。場を提供する人がその日の主人公である。自社もしくは自宅でこじんまりと開かれるので、雰囲気はきわめてインフォーマルだ（形式ばらない）が、他面で各グループが自律的に（しかし足並みをそろえて）動くように SBANE 当局が用意した規則・手順の手引^{ガイドライン}はかなり詳細である。(4)スモール・ビジネスの経営者もしくは所有者であれば業種を問わないという意味では、多業種に渡っているが、経営者もしくは所有者という会員資格・入会制限を厳格に定めているため、加入者の同志的結束は固い。コンサルタントや公認会計士がダイアログに混入することもないわけではないが、あくまでも専門家としてではなく、（たとえ2~3人の事務所^{ベルソフ}にせよ）経営者としての顔（アイデンティティ）で対話することを前提とする。

会の密室的な性質上、観察者としての私の立場、目立ち方、そもそも参加できるかどうかの可能性は、フォーラムの場合と大きく異なる。10~15名の、しかも原則としては外部者を入れない会に、しかも「秘密」も語られる場に、第三者として、まったく会に影響を与えない方式で参加するのは困難である。

17 より正確には、この理論的に興味ある対照性ゆえに、より詳細な比較対象として「理論的にサンプリング」（グレーサー&ストラウス、1967）したのである。

必要な手順は、SBANEの教育担当ディレクター（ダイアログの運営責任者）の許可を得ること、しかるべきダイアログ・グループを紹介してもらうこと、そのグループのグループ・コーディネータの承認を得ること、オブザーバーの参加（より正確には「同席」）に他のメンバー全員が異議を申し立てないこと、これらすべての条件をみたす必要があった。

フォーラムの調査を通じて、ボストンの企業者コミュニティの中心人物と面談ができていたことから、またその一部の人びとはSBANEの活動にもかかわっていたため、まずSBANEの教育担当ディレクターの信頼を得ることができた。彼女は10回以上もの面接に応じ、キー・インフォーマントの役割を果たしてくれた。さらに、私がMITの研究プロジェクトとして調査をおこなっていること、既に比較対象のフォーラムの観察・面接調査はほぼ終えていたこと、ならびに私自身がグループ・ダイナミクスやリーダーシップの専門家であることから、グループ・コーディネータやメンバーの人びとに調査の目的をよく理解してもらい、結局3つのグループと2回のコーディネータ委員会を観察することができた。

先に述べた通り、グループの規模ゆえに、もはや純粋に非関与的であるというのとは不可能であった。また、議論が白熱しているときには、私の存在は消えていたが、会の終わり頃の雑談になると、必ずといっていいほど「フォーラムと比べてどう思うか」、「今日のグループ討議をどう思うか」と尋ねられた。後者の間にコメントする時点で、私のフィールドでの役割は、Cモード寄りに移行せざるを得なかったが、グループ・プロセスについて、コメントするだけでなく、「なぜ特定のやりとりが生じたか」を質問することにより、Eモードでは得られない追加的データを得た。しかし、企業者ネットワーキングの専門家であるかのごとく、つまり「（プロセス促進者でなく）内容エキスパート」（シャイン、1978）としてこの両者の間に答えることは極力避けた。

(4) ダイアログでの面接データ

既述の順序効果（先にフォーラムを知っている）とMITの冠のもつレピュ

テーション効果が¹⁸、ここでは決定的であった。むしろ MIT からの研究者であることによる威圧感をどのように抑制するか、つまり私自身がボストンの企業者活動についてまだいかに不案内であるか、を強調する必要があった。

SBANE の教育担当ディレクターに、まず取っ掛かりの3名を、後に1986年度の全グループ・コーディネータとダイアログの創設者（調査時点では既にSBANEを脱会）を、紹介してもらった。紹介といっても住所・会社名の情報提供のみであった。ただ、偶然にでも面接予定者に会えば私の調査について一言だけでも言及するよう依頼した。

今回は、MIT 教官の紹介状は避け、ディレクターの承認を得ていることを調査依頼状に明記して、後に電話で日程調整をするという方法をとった。結果、面接したいと思っていた人びと全員に面接できた。誰一人として断わらなかったのが不思議なぐらいであった。¹⁹

相対的ステータス フォーラムの中核メンバー、たとえば MIT の元教官や現職教授にとって、MIT に来て新参の若手研究者とのインタビューは、文字通りその道の権威が学生に教えるかのような形態となった（しかも、それはその時点の私にとってプラスであった）。

ダイアログでの被面接者のなかには、ビジネス・マン（ないしウーマン）として、フォーラムの中核メンバーと同等もしくはそれ以上に成功している人びともいたが、こちらの側で気をつけない限り、あたかも私の側が MIT に拠る研究プロジェクトの推進者として（つまり、なにがしかの「権威」として）扱われる傾向があった。²⁰ 各ダイアログ・グループとも自らのグループ

18 MIT 教授フォン・ヒッペルの主査する別の調査プロジェクトにおいて、MIT という名前によって、電話ですらかなり深いレベルに立ち入ったデータが入手しうることを経験した (cf. フォン・ヒッペル (1985) の附録におけるケース作成プロセス参照)。

19 MIT エンタープライズ・フォーラムが、パネリストをボランティアとして招くとき、元フォーラムの運営委員会委員長が「MIT でのフォーラムなんですけれど来てくれませんか、というのと誰一人として断わらないのです」と語っていたことが思い出される。

20 教育水準の中位数は、フォーラムでは修士、ダイアログでは学士であった。また、グラノベター (1982) が示唆するように、高学歴の人ほど弱連結を平気でうまく活用している。

の運営方法や成果の如何を映し出す鏡をもたない。他面で自らのグループには強い愛着をもっている。そのため先に述べたように、「私たちのグループをどう思うか」、「他のグループに比べてどうか」、「フォーラムと比べたらどのように異なるか」、という議論になると、私はCモードに近い立場²¹に立ってプロセス・コメントをすることがあった。

(5) フィールドでのクレディビリティ

ネットワーキングを目的とする組織にとって、メール・リスト、参加者リスト、全メンバー・リストの類いはそれ自体貴重な無形資産である。両組織において、どの程度まで研究者としての私が受け入れられていたか確かめる試金石は、郵送サーベイ調査の母集団を確定するためまた住所等の情報を得るため、このような名鑑を入手できるかどうかにあった。両組織よりこれらを得たとき、そのステップが調査プロセスの関所のひとつであったため、はじめて現場^{フィールド}の人びとが私に帰属してくれていたクレディビリティのレベルがわかって嬉しかった。

より一般的に言って、フィールド・リサーチにおける研究者のクレディビリティの程度は、(1)キー・インフォーマントとの関係を樹立できるかどうか、(2)未公刊の内部資料にアクセスできるかどうか、(3)必要な人物を(少なくとも)紹介してもらえるかどうか、(4)この調査の場合におけるメール・リストにあたるような組織の中核的資源の使用が許可されるかどうか、によって確認されるであろう²²。

IV 今後の定性的研究への展望

本稿は、私自身の調査研究における方法論への自己言及であるため、意図的にきわめてパーソナルな(通常は水面下か論文の脚注に埋もれるような)部分

21 フォーラムでは、運営委員会自身がそれなりに evaluation researches を試みていたので、私がサーベイを実施する以前の観察・面接データ収集時に、プロセス・コメントを求められることはまずなかった。

22 定性的データによる研究の信頼性・妥当性の問題については、カーク&ミラー(1986)を参照。

を照射している。定性的研究におけるCモードとEモードも、それぞれ組織クリニクションとしてのエド・シャイン、組織エスノグラファーとしてのジョン・バン・マーネンと私とのパーソナルな関係を反映している。

臨床的方法といえは各種の診断的測定用具や検査を思い浮かべようだが(cf. ロッター, 1964), エピグラムに掲げたフーコー(1963)の言葉が示す通り、臨床的活動の本質は「暗号文の解読」に近い。シャインの臨床的方法(1987a)や社風分析(1985b)におけるキーワードも「解読」である。

他方、同じく冒頭に掲げたマリノフスキー(1922)の言葉が示すように、エスノグラファーもただ何かが起こるかを待つ人というよりも「能動的な狩人」として、ふつうなら見えない舞台裏の奥深くまで接近する。バン・マーネンが²³この種の狩人であることに、疑いはない。

さて今後の展望を考えるために、まずはあえて、Cモード、Eモードの問題点や困難を指摘しておきたい。ストラウス(1987)では、「臨床的」即「規範的」と軽く捉えられているが、Cモードの研究が規範的であることはシャイン(1983, 1985, 1987a)も認めるところであり、真に重要な問は、「深みのある」規範モデルを構築・提示できるか否かという点である。Cモードのより実際的な問題は、(1)ある程度、実際界に知られているぐらいでないともそもそもプロセス・コンサルタントとしてなかなか依頼を受けない点、(2)もしCモードで組織に入り込めてもそれが必ずしも論文や著作につながらない点にある。前者については、「エド・シャインの名前だからできる」というのが、スローンの若手教官、大学院生のコメントである。後者については、シャインの下で、分割後のAT & TのODがらみのプロセス・コンサルテーションをしていた私の畏友がCモードではデータはどんどん集まるのにどうしても博士論文が書けず、結局シャインの紹介で10カ月間DECに入り込み参加観察して、バン・マーネンの指導下にEモードでやっと研究を完成した、という最近の例がある。私自

23 マリノフスキーの日記の公刊によって彼がトロブリアンド諸島の現地の人びとに対して、著作(1922)で記されているほど「中立的」な親近感をもっていなかったことが、判明したとしても、人類学を旅行記に頼る書齋の学から現地に引張り出した彼の功績は大きい。

身も帰国後、あるメーカーの革新的事業部門長の依頼によりCモードでデータ蓄積しているプロジェクトに接しているが、いつその分析結果がなんらかの形で公刊できるのかの見通しはまったくない²⁴。

次に、Eモードの問題点は、ただひたすら現場を観察するだけで（たとえ能動的狩人としてどんどん奥深く踏み込んでも）必ずしも、常になんらかの興味あるストーリー、理論的に意味あるテーマ、より端的には驚きや洞察がそこに行けばころがっているという保証がないという点にある。バン・マーネンの研究歴をみても、イギリスでの警察組織研究で、「勤務時間内の幹部の飲酒」という驚くべき事実を繰り返し観察し「官僚制組織におけるタイムアウト」という概念を創出しうる（バン・マーネン, n. d.）こともあれば、他方でニュー・イングランド地域の漁業従事者の民俗誌の場合のように、必ずしもこのような驚きやニュー・コンセプトを見出せないこともある（ミラー&バン・マーネン, 1979）。

ただし、個々の民俗誌に驚くべき発見が仮りに無くとも地味な記述が複数蓄積されるとそのメタ分析（meta-ethnography）から新たな洞察が比較を通じて生まれる（ノブリット&ヘア, 1988）こともある。また、複数のケース分析（cf. イン, 1984）から、かつてホーマンズ（1950）がおこなったように、より抽象度の高い理論が生まれる可能性もある。

第3に、それぞれの問題点を克服する際、先にも触れたように、Cモードの研究者とEモードの研究者が共同すること、あるいは同じ研究者が（自覚的に）CモードとEモードを行き来しうることに、再度注意を促したい。たとえば、いくつかの都市のインキューベータ計画（cf. 金井, 1988ef）や企業者ネットワークワーキングのためのコンベンションに向けた検討会や企画に、研究者として私自身参加することがある。ボストンでの経験をふまえて内容面の助力を求められることがあるが、できるだけCモードで、当事者自らが解決方法を見出すプ

24 とはいえ、日本でもじっくりと説明すれば、プロセス・コンサルテーション的な研究のあり方が理解してもらえることがわかっただけでも、今後の大きな励みである。

プロセス面のみかかわるようになってきた。他面で、企業者ネットワークの集いに自らメンバーとなったり、その仕掛人とともに行動するときには、できる限り内部からの眼で（Eモードで）記録を残すように努めている。シャインが「臨牀的視角は民俗誌的視角と併用された方がよい——両視角は人間から成るシステムの異なる側面に焦点を合わせているのだから」（1987 a, p. 55）と両者の補完性を主張する所以である。

最後に、これから定性的研究をめざす人びと、特に若い世代の研究者への若干の指針と、本稿のもつ管理論的含意についてふれておきたい。

定性的研究方法論を生産的に活用する上で、3つの点に注意が必要である。

ひとつは、トレーニングの順序としては、定量的方法がある程度経験してから定性的方法に進む方がベターだ、ということである。単純にいうと逆は困難だからである。理想として方法論的トライアングレーション（定量的方法とのリンク）をめざすなら、両方の方法に習熟しているにこしたことはない。

第2に、定性的研究方法論者が強調する「根づいた理論」や「濃密な記述」の意味を取り違えて、理論への指向を失うことを特に警告したい。定性的研究で成功している研究者は、一方で、「経験近傍な（experience-near）」^{マネジリアル・インプリケーション}当事者自身の概念（ギアツ、1973）で世界を濃密に（そして無垢に）記述することを至上目標としているが、他方で、きわめて多読、博識で多数の公式理論もよく熟知している。^{フォーマル・メモリー}逆に、理論なき定量的研究は広範な文献の理解なくとも限られた枠組内で可能である。

第3に、定性的方法論は、経営学者として現場に出入りしている間に自然と身につく、という安易な姿勢を避けることが肝要である。定性的研究で足跡を残した人びとは例外なく、方法論的問題にきわめて敏感であった。

以上のごとく、本稿は研究方法論の論考ではあるが、経営管理論的な実践上の含意がないわけではない（cf. シャイン、1987b）。それどころか、環境の探査^{スキャニ}、そこからの意味形成（加護野、1988）、知識の創出（野中、1988）が、企業の戦略や組織づくりに大きな影響を与えることを前提とすれば、研究者（経

営学者)ばかりでなく、内部メンバー(特に経営トップ、戦略的ミドル、本社スタッフ)にとっても、現場^{フィールド}からのデータ収集方法のバラエティを自覚することは有用なはずである。現場は、組織内のある部門かもしれないし、自社製品の市場かもしれない。モラル・サーベイや市場調査などの定量的分析ではとても飽き足りない実務家の定性的洞察力をさらに改善する上でも、本稿でのCモードやEモードという比較・対比が役立てば幸いである。ましてやMBWA(現場遊弋^{ゆうよく}管理)がもてはやされ、わが国企業での現場主義の有効性が議論され、またサービス業などでタウン・ウォッチングやショップ・ウォッチングによる「感性的」直観が再認識されている今、定性的データの収集方法とその解釈方法にまつわる研究方法論は、実践的な役目も(目的としてではないにせよ)結果として担うようになりつつあるのかもしれない。

行動はそれが起こった場の関数である。——クルト・レヴィン『社会科学における場の理論』

参 考 文 献

- Adler, Patricia A., and Peter Adler (1987). *Membership Roles in Field Research*. Qualitative Research Methods Series, Vol. 6. Newbury Park, CA.: Sage.
- Agar, Michael H. (1985). *Speaking of Ethnography*. Qualitative Research Methods Series, Vol. 2. Beverly Hills, CA.: Sage.
- Bailyn, Lotte (1977). "Research as a cognitive process: Implications for data analysis." *Quality and Quantity*, 11: 97—117.
- Becker, Howard S. (1956). "Interviewing medical students." *American Journal of Sociology*, 62: 199—201.
- Becker, Howard S. (1963). *Outsiders; Studies in the Sociology of Deviance* New York: The Free Press. [村上直之訳『アウトサイターズ——ラベリング理論とは何か, 新泉社, 1978].
- Becker, Howard S. (1970). *Sociological Work: Method and Substance*. New Brunswick, NJ.: Transaction Books.
- Becker, Howard S. (1982). *Art Worlds*. Berkeley: CA.: University of California Press.
- Becker, Howard S. (1986). *Doing Things Together: Selected Papers*. Evanston, IL.: Northwestern University Press.
- Blau, Peter M. (1963, originally in 1955). *The Dynamics of Bureaucracy: A*

- Study of Interpersonal Relationships in Two Government Agencies*. Revised ed. University of Chicago Press.
- Castaneda, Carlos (1968). *The Teaching of Don Juan: A Yaqui Way of Knowledge*. Berkeley, CA.: University of California Press. [真崎義博訳『呪術師と私——ドン・ファンの教え』二見書房, 1974]。
- Clifford, James and George E. Marcus (1986). *Writing Cultures: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley, CA.: University of California Press.
- Cook, Thomas D., and Donald D. Campbell (1979). *Quasi—Experimentation: Design and Analysis Issues for Field Settings*. Boston: Houghton Mifflin.
- Dalton, Melville (1959). *Men Who Manage: Fusions of Feelings and Theory in Administration*. New York: Wiley.
- Denzin, Norman K. (1971). "The logic of naturalistic inquiry." *Social Forces*, 50 (No. 2): 166—182.
- Dexter, Lewis A. (1970). *Elite and Specialized Interviewing*. Evanston, IL.: Northwestern University Press.
- Fielding, Nigel G., and Jane L. Fielding (1986). *Linking Data*. Qualitative Research Methods Series, Vol. 4. Beverly Hills, CA.: Sage.
- フーコー, ミッシェル (訳1969, 原著1963)。『臨床医学の誕生』神谷美恵子訳, みすず書房。
- Garfinkel, Harold (1964). "The routine grounds of everyday activities." *Social Problems*, 11: 225—250.
- Geertz, Clifford (1973). *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books.
- Geertz, Clifford (1983). *Local Knowledge: Further Essays in Interpretive Anthropology*. New York: Basic Books.
- Glaser, Barney and Anselm L. Strauss (1967). *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. New York: Aldine.
- Goffman, Erving (1973). *Frame Analysis*. Cambridge: Harvard University Press.
- Gouldner, Alvin W. (1954). *Patterns of Industrial Bureaucracy: A Case Study of Modern Factory Administration*. New York: Free Press. [岡本秀昭・塩原勉訳『産業における官僚制——組織過程と緊張の研究』ダイヤモンド社, 1963]。
- Granovetter, Mark S. (1982). "Strength of weak ties: A network theory revisited." In Peter V. Marsden and Nan Lin eds., *Social Structure and Network Analysis*. Beverly Hills, CA.: Sage.
- Hartwig Frederick (with Brian E. Dearing, 1979). *Exploratory Data Analysis*. Beverly Hills, CA.: Sage.
- Heritage, John (1984). *Garfinkel and Ethnomethodology*. Polity Press, UK.
- Homans, George C. (1950). *The Human Group*. New York: Harcourt, Brace & World.

- 加護野忠男 (1988). 『組織認識論——企業における創造と革新の研究』千倉書房.
- 金井壽宏 (1983). 「研究開発部門における有効な組織風土とリーダーシップ」『神戸大学経営学部研究年報』第29巻, 103—212頁。
- 金井壽宏 (1984). 「依存性対処の管理者行動——戦略・革新指向のミドル・マネジャーの課題」『国民経済雑誌』第150巻第6号, 90—119頁。
- 金井壽宏 (1985). 「研究開発マネジャーの発想と行動」『神戸大学経営学部研究年報』第31巻, 147—185頁。
- 金井壽宏 (1987 a). 「企業者コミュニティにおけるネットワーキング組織の生成と機能」『神戸大学経営学部研究年報』第155巻第4号, 63—300頁。
- 金井壽宏 (1987 b). 「企業者ネットワーキング組織における弱連結の強み」『国民経済雑誌』第155巻第4号, 57—91頁。
- 金井壽宏 (1988 a). 「企業者のサークルとクラブ——ネットワーキング組織体の類型論と比較分析の試み」『神戸大学経営学部研究年報』第34巻, 91—224頁。
- 金井壽宏 (1988 b). 「企業者のサークルとクラブの相互浸透——企業者ネットワーキング組織体のライフ・サイクル」『組織科学』第21巻第4号, 55—66頁。
- 金井壽宏 (1988 c). 「128ベンチャー・グループの集い——軽い企業者ネットワーキング」『ベンチャー・フォーラム』(VEC 会報), No. 60, 1—3頁。
- 金井壽宏 (1988 d). 「創造性を喚起する企業者ネットワーク活動」『ダイヤモンド・ハーバード・ビジネス』June—July 号, 26—38頁。
- 金井壽宏 (1988 e). 「企業者ネットワークを通じての融合——異業種交流パラドクスとインキュベータのジレンマ」『こうべ経済』1988 No. 2 (通巻第22号), 2—11頁。
- 金井壽宏 (1988 f). 「インキュベータの組織化」『研究技術計画』第3巻第3号, 219—228頁。
- 金井壽宏 (1988 g). 「企業者交流のもつ『運への間口』と『秘密の奥行』——米国ベンチャー経営者のネットワーキングからの教訓」『日経ベンチャービジネス交流センター会報』Vol. 4, No. 52, pp. 2—5; Vol. 4, No. 53, pp. 6—8
- 金井壽宏 (1989近刊). 「変革型リーダーシップ」『神戸大学経営学部研究年報』第35巻。
- Kanter, Rosabeth Moss (1977). *Men and Women of the Corporation*. New York: Basic Books.
- Kanter, Rosabeth Moss (1983) *The Change Masters: Innovation for Productivity in the American Corporation*. New York. Simon and Schuster.
- 加登 豊 (1988). 「DSS 研究におけるケース・リサーチの意義」『産業経理』第48巻第3号, pp. 58—66。
- 河合隼雄 (1973). 『カウンセリングの実際問題』誠信書房。
- 河合隼雄 (1975). 『カウンセリングと人間性』創元社。
- 河合隼雄 (1976). 『影の現象学』思索社。
- Kidder, Tracy. (1981). *The Soul of A New Machine*. New York: Avon Books.

- [風間禎三郎訳『超マシン誕生——コンピュータ野郎たちの540日』ダイヤモンド社, 1982]。
- Kidder, Louise H. (1981). *Selitz, Wrightsman & Cook's Research Methods in Social Relations*. 4th ed. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Kirk, Jerome and Marc L., Miller (1986). *Reliability and Validity in Qualitative Research*. Qualitative Research Methods Series, Vol. 1. Beverly Hills, CA.: Sage.
- Leiter, K. (1980). *A Primer on Ethnomethodology*. New York: Oxford University Press. [高山真知子訳『エスノメソロジーとは何か』新曜社, 1987]。
- Lewin, Kurt (1951). *Field Theory in Social Sciences: Selected Theoretical Papers*. Ed. by Dorwin Cartwright. New York: Harper & Brothers. [猪股佐登留訳『社会科学における場の理論』誠信書房, 1956]。
- Malinowski, Bronislaw (1922). *Argonauts of the Western Pacific: An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea*. Routledge & Kegan Paul: UK.
- Martin, Joanne (1982). "A garbage can model of the research process." In Joseph E. McGrath, Joanne Martin, and Richard A. Kulka, *Judgement Calls in Research, Studying Organizations: Innovations in Methodology*, Vol. 2. Beverly Hills, CA: Sage. pp. 17—39.
- May, Rollo (1983). *The Art of Counseling*, New York: Abingdon Press. [黒川昭登訳『カウンセリングの技術』岩崎学術出版社, 1966]。
- Miller, Marc L., and John Van Maanen (1979). "Boats don't fish, people do: Some ethnographic notes on the federal management of fisheries in Gloucester." *Human Organization*, 38: 377—385.
- Noblit, George W., and R. Dwight Hare (1988). *Meta-ethnography: Synthesizing Qualitative Studies*. Qualitative Research Methods Series, Vol. 11. Newbury Park, CA.: Sage.
- 野中郁次郎 (1988). 「情報と知識創造の組織論——イノベーションの組織化過程」組織学会昭和64年度年次大会 (於 一橋大学) 発表 (バックグラウンド) フル・ペーパー。
- Powell, Walter W. (1985). *Getting Into Print: The Decision-Making Process in Scholarly Publishing*. The University of Chicago Press.
- 佐藤郁哉 (1985). 『ヤンキー・暴走族・社会人——逸脱的ライフスタイルの自然史』新曜社。
- Rogers, Mary F. (1983). *Sociology, Ethnomethodology, and Experience: A Phenomenological Critique*. Cambridge University Press, UK.
- Rotter, Julian B. (1964). *Clinical Psychology*. Englewood Cliffs, NJ.: Prentice—Hall, [詫摩武俊訳『臨床心理学』岩波書店, 1966]。
- Schatzman, Leonard and Anselm L. Strauss (1973). *Field Research: Strategies*

- for *Natural Sociology*. Englewood, Cliffs, NJ.: Prentice—Hall.
- Schein, Edgar H. (1969). *Process Consultation: Its Role in Organization Development*. Reading, MA.: Addison—Wesley.
- Schein, Edgar H. (1978). "The role of the consultant: Content expert or process facilitator?" *Personnel and Guidance Journal*, February 1978: 339—343.
- Schein, Edgar H. (1983). *Notes on the Clinical Perspective To Gathering ORG. Data (vs. Ethnographic, Journalistic, Qualitative)*. Sloan School of Management, MIT. Mimeo dated November 1983.
- Schein, Edgar H. (1985 a). *The Clinical Perspective in the Gathering of Organizational Data*. Sloan School of Management, MIT. Mimeo dated March 1985.
- Schein, Edgar H. (1985 b). *Organizational Culture and Leadership*. San Francisco: Jossey—Bass.
- Schein, Edgar H. (1987 a). *The Clinical Perspectives in Fieldwork*, Qualitative Research Methods Series, Vol. 5, Newbury Park: CA.
- Schein, Edgar H. (1987 b). *Process Consultation, Volume II, Lessons for Managers and Consultants*. Reading, MA.: Addison—Wesley.
- Schein, Edgar H. (1988). *Process Consultation, Volume I, Its Role in Organization Development*. Reading, MA.: Addison—Wesley. Revised ed. of Schein (1969).
- Schön, Donald A. (1983). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. New York: Basic Books.
- Schutz, Alfred (1970). *On Phenomenology and Social Relations*. Edited and with an introduction by Helmut R. Wagner. University of Chicago Press. [森川眞規夫・浜田出夫訳『現象学的社会学』紀伊国屋書店, 1980].
- Spradley, James P. (1979). *The Ethnographic Interview*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Strauss, Anselm L. (1987). *Qualitative Analysis For Social Scientists*. Cambridge University Press.
- Van Maanen, John (1973). "Observations on the making of policemen." *Human Organization*, 32: 407—418.
- Van Maanen, John (1975). "Police socialization." *Administrative Science Quarterly*, 20: 207—228.
- Van Maanen, John (1979 a). "The self, the situation, and the roles of interpersonal relations." In Warren Bennis et al., eds., *Essays in Interpersonal Dynamics*, pp. 43—101.
- Van Maanen, John (1979 b). "The fact of fiction in organizational ethnography." *Administrative Science Quarterly*, 24: 539—550.
- Van Mannen, John (1982). "Fieldwork on the beat." In J. van Maanen et al., ed., *Varieties in Qualitative Research*. Beverly Hills, CA.: Sage.

- Van Maanen, John (1983) ed. *Qualitative Methods*. Beverly Hills, CA.: Sage.
- Van Maanen, John (1988). *Tales of the Field: On Writing Ethnography*. The University of Chicago Press.
- Van Maanen, John (n. d.). *Power and the Bottle: Drinking Patterns and Social Relations in a British Police Agency*. Sloan School of Management, MIT.
- Van Maanen, John and Edgar H. Schein (1979). "Toward a theory of organizational socialization." In Barry M. Staw ed., *Research in Organizational Behavior*, Vol. 1. Greenwich, CN.: JAI Press. pp. 209—264.
- Von Hippel, Eric (1988). *The Sources of Innovation*. Oxford University Press.
- Webb, Eugene J., Donald T. Campbell, Richard D. Schwartz, Lee Sechrest, and Janet B. Grove (1981). *Nonreactive Measures in the Social Sciences*. Boston, MA.: Houghton Mifflin.
- Whyte, William Foote (1981, 1st ed. in 1943). *Street Corner Society: The Social Structure of an Italian Slum*. Revised and expanded 3rd ed. The University of Chicago Press. [寺谷弘壬訳『ストリート・コーナー・ソサエティ——アメリカ社会の小集団研究』垣内出版, 1979]。
- Yin, Robert K. (1984). *Case Study Research: Design and Methods*, Applied Social Research Methods Series, Vol. 5. Beverly Hills, CA: Sage.

附録 研究調査プロセスのクロノロジー——進化的側面と計画的側面

Research Process -- Evolutionary and Planned --

<i>Evolutionary</i>	<i>Merging Points</i>	<i>Planned</i>
<ul style="list-style-type: none"> -Being intrigued by the cultural milieu of M.I.T. where entrepreneurship is naturally emphasized. -Read Rich & Gumpert (1985) that is based on their experiences at the M.I.T. Enterprise Forum. 	<ul style="list-style-type: none"> -I visited National Director of MIT/EF and one of the founders with ex-director of Mitsubishi Electric in Summer of 1985. 	<ul style="list-style-type: none"> -Trying to find concrete research issues that deal with the association between social networks and innovative activities
<ul style="list-style-type: none"> -<i>Inc. Magazine's</i> cover story on "Entrepreneurs Networking": Being intrigued by this "buzzword." 	<ul style="list-style-type: none"> -National Director of the Forum became a major informant. 	<ul style="list-style-type: none"> -Preference over the research issues that I would not find in Japan, about which I could make the best use of M.I.T. -Began to attend the Forum's to observe entrepreneurial networking in action. -Frequent talks with National Director
<ul style="list-style-type: none"> -Became intrigued by paradoxes like strength of weak ties (Granovetter, 1983) and reliance of self-reliant entrepreneurs on others -Emerging ideas of club versus circus contrasts through the analysis of the history of the Forum and some literature (Moore, 1979; Kadushin, 1966, 1968). 	<ul style="list-style-type: none"> -I found out about the Dialog Groups of SBANE through interviews with an ex-MIT professor, the result of my questionnaire survey, and Gumpert & Boyd (1984). 	<ul style="list-style-type: none"> -Reviewed relevant literature in three domains: entrepreneurship; social network theories; and interorganization theories. -Intensive interviews with insiders of the Forum. (Jan-Feb, 1986) -Access to internal documents -Questionnaire survey of participants of a monthly session.

(continued)

Evolutionary

Merging Points

Planned

-Involved with the study of user groups in PCB CAD/CAM software industry as an organizational vehicle for information sharing among engineers. (Sum, 1986)

-Evolution of comparative framework: Reorganization of previous thoughts.

-Rediscovery of the comparative methods of the Glaser & Strauss' (1967) sort.

-Awareness of a broader cultural context in which this study resides: Bellah et al. (1985) and Tocqueville's classical work.

-Cultural issues became salient.

-Cross cultural comparison in the future issue (beyond thesis).

-Director of education at SBANE became a major informant.

-Talks with occasional visitors from Japan -- Both academics and business persons about the 128 high tech community,

-Intensive interviews with group coordinators and other members of the Dialog Programs (Dec. 1986-Jan, 1987)

-Access to internal documents of the Dialog Programs.

-More systematic questionnaire survey for both Forum and the Dialog (May, 1987)

-A redefinition of the study in the broader domain: The basic entrepreneurial paradox as a special case of the tension between individualism and social commitment.

-Analysis of survey data and content reanalysis of the interview data.

-The final merging point: Dissertation thesis.

